



島根県隠岐諸島で「看取りの家 なごみの里」を取材(國森)

JMASの活動の一環で、アンゴラの子どもたちに綿菓子を作って振る舞うことがあるんですが、彼らは「並びなさい」と言っても並ばない。隙間があればどんどん入ってくる。外国のメディアが日本人の節度ある行動を讚えるのはもっともだと思います。

國森●私も世界の被災地や紛争地を見て歩きましたが、今の東北の状況下で、窃盗が全くないわけではないにしても、店舗などでの表立った略奪がないのはすごいことだと思います。

秋吉●日本人みんなの節度が、利己的な行動をする人間が多少いたとしても、それを律する力になっているんですよ。

フォトジャーナリストという職業

——國森さんが、『sousei』のようなマーケットも小さい仏教系のメディアを、敢えて作品発表の場を選ばれたのには、どんな思いがあったのですか？

國森●フリーに転身したきっかけはイラク戦争(2003年)でした。当時は「自己責任」が叫ばれていましたから、会社に属しては取材には行けなかったんです。でも戦地の惨状を何とかでも伝えたくったのですが、結果的には読者も身内も「何で今、イラクに行くんだ」という反応が多くて、「身近な人の生き死にならともかく、イラクで起こっていることは、日本人にとつて遠い地域で起こっていることではないんだ」とて意気消沈しました。でも、ひよんなことから『sousei』を目にして、「もしかしたら自分の思いは、お坊さんになら届くかもしれない」とて思ったんです。

——被災地や紛争地では、直接的な救援活動が優先され、取材活動自体が二次的に扱われることはないですか？

國森●そうですね。自分に何ができるのか、むしろ活動が現地の負担になつてはいないか、とは常に考えます。自分も自衛隊とか消防隊員のように体を張って、一人でも救出可能であれば、と願いながら現地に行くんですけど、結局(東日本大震災取材で)自分が見つけたのは、すでに亡くなっている人たちばかり……。すごい無力感があります。でも、自分がイラクで被害を受けた子どもたちを紹介したことで、支援のために寄付してくれた人もいたんです。自分にはカメラとペンしかない。自分ができることの中で、強い「祈り」を持って活動していますね。

秋吉●それはよく分かります。とある

命が亡くなつてから様々な関わりや活動が始まるのは、我々僧侶も同じです。飼っていた金魚が亡くなると、日本人は土に埋めて弔いますが、カナダなどではトイレに流すのが当たり前だそうなんです。また、1985年の御巣鷹山日航機墜落事故の際も、いつまでも遺族が乗客の遺体を探すのを、外国の方は「何であんなに遺体に拘るのだ。もう亡くなっているのに」という感想を漏らしたと聞きます。日本人にとつて「死後」には特別な意味があるのではないのでしょうか。

土井●今回の震災も、今後の10年を見据えた規模で復興に当たらなければいけません。その間に衆目を被災地になぎ止めるためにも、國森さんのような仕事が必要なんです。

電話相談と、AKINANと、四門出遊

——秋吉委員長は、以前から精神保健福祉士としても活躍され、電話相談の実績もありました。基幹事業委員長として電話相談を担当することになった時、率直にどう思われましたか？

秋吉●この事業は10年は費やさないとい人前にならないと思いましたが。それを任期の2年間でできることがあるとすれば、それは10年続けられるくらいの想定で土台作りに専念することでした。それから、相談員を養成することと同時に進行で、相談員自体のケアもしなければ、と思いました。私自身、罵声を浴びせられたり、相談員の受け容

えが気に入らなくて「法的に訴えるぞ」と脅されるなどして、相談員側が燃え尽きて辞めていくのを何回も見えてきました。今期は、ただでさえ研修時間が十分に確保できたわけではありませんから、相談員がいきなり、いわゆる「モンスター相談者」に当たらないよう、広報活動を抑制したのが実状です。相談者ばかりではなく相談員の「いのちの声」にも耳を澄まさなければ、「自死者年間約3万人」という構造は変えられないでしょう。

——そうまでして、全曹青という組織が電話相談に取り組む意義はなんだと思えますか？

秋吉●研修会の参加者が傾聴法を学び、語るだけではなく聴くことに意識を向けることができたこと。それから、各自の具体的な活動の場であるお寺において、実際に来られる人だけでなく、電話でも話を聴くことができる。お寺にいながら活動の枠が可変する可能性を提供できたことではないでしょうか。



國森康弘氏